連載Ⅱ
当財団専門委員
わたしの1冊
第４回

琉球大学　観光産業科学部　学部長　　下地　芳郎

『琉球の文化』復刻版

式場隆三郎編　榕樹社　1995年（初版は昭和書房版1941年）

沖縄観光といえば〝青い海、青い空、白い砂浜〟というイメージが定着しているが、実は、海をテーマとした観光はまだ40年ほどの歴史しかない。

本書、『琉球の文化』は、沖縄観光の本質が琉球王国時代から受け継がれてきた〝文化〟にあることを示す非常に重要な書である。戦前の日本を代表する思想家である柳宗悦（むねよし）を中心とする民藝協会の運動家による琉球文化論であり、初版は１９４１年である。１９９５年の復刻版では、式場隆三郎が編者となって７名が琉球文化論を展開し、現代の専門家による解題が加わっている。本書の中心である、柳の『琉球の富』は、戦前の沖縄各地で見られた赤瓦屋根、舞踊、組踊（くみおどり）、音楽、工芸、琉語などを取り上げ、その美を生み出した背景としての生活文化の解説を行っており非常に興味深い。

柳は琉球文化の代表として、まず墳墓を取り上げている。精霊への信仰が住民の生活を支配する原理だと指摘している。また、首里について、柳は「日本の城下町で最も美しい」と称賛している。当時の標準語教育を重視する姿勢にも警鐘を鳴らし、琉語（方言）の持つ美しさを保全することの重要性を説いた。那覇の街については、１８００年代に英国でベストセラーになったバジル・ホールの琉球訪問記録でも「爽やかで、ロマンチックな風景の完成したもので人工の美が加わっている。絵のように美しい」と記されている。

こうした生活文化を資源とする沖縄観光の魅力は、１９３７年から大阪商船が実施した沖縄ツアーを通して国内に伝わるようになった。７泊８日の沖縄への船旅は当時の富裕層にとって異文化に触れる貴重な機会だった。ツアーでは、首里城、泡盛醸造所、空手、沖縄古典劇などを中心とする日程は人気があったが、残念ながら１９４１年に中断された。その後の沖縄が戦争によって壊滅的に破壊されたことで、異文化を訪ねる旅は失われ、沖縄観光はゼロからの出発を余儀なくされたのである。

戦後、慰霊訪問団受入れから再開した沖縄観光は、海をテーマにすることで国内観光客の注目を浴びて飛躍的な発展を遂げ、首里城復元（１９９２年）を契機に文化的価値が再評価され、現在に至っている。柳が称賛した琉球の文化は、戦後の米軍統治下のアメリカ文化と融合し、音楽、食、工芸などで新たな分野を生み出した。

本書とは、２０１２年の夏、私が沖縄県の本土復帰40周年を契機に、これまでの観光政策を検証している中で出会った。沖縄の歴史や文化を論じた書籍は数多く出版されているが、その中でも多くの方に読んで頂きたい一冊である。　（しもじ　よしろう）

下地芳郎（しもじ　よしろう）
1957年、沖縄県生まれ。1981年に沖縄県庁入庁。カナダトロント大学派遣後、香港事務所初代所長として、東アジアからの観光客誘致に取り組む。観光政策統括監を経て2013年3月に沖縄県退職。同年4月から琉球大学観光産業科学部教授として観光政策論などを担当。2016年4月に観光産業科学部長就任。